

止たるもよし、

〔梵舜日記〕天正十一年三月九日、本所ニ爲祝義赤小豆飯在之、

〔八水隨筆〕南郭先生小豆飯好物にて、膳に向はれし所へ、金華來られ、何を食し給ふ、あづきめし也、
足下の食の俗なる事と笑われしよし、予思ふに金華先生鬼の首をてうちんの紋に付られしを、
徂徠先生の見給ひて、金華が物ずきの俗なると笑はれしと也、尋常の人小豆めしを食し、鬼の首
を畫して、うちんとぼしたればとて、俗中には目にも立まじけれども、雅人の俗を弄ばるゝは、却
て雅のさたになるも、あぢなもの、

赤飯

〔饅頭屋本節用集食物〕赤飯

〔安齋隨筆後編三〕赤飯ハメシ小豆の

〔倭訓栞中編十二〕せきはん 眞詰に青精石飯と見えたり、青精は南天燭の事にて、黒飯草ともい

ふよし本草に見えたり、石飯に必南天燭、葉を去くは此義なるべし、

〔和漢三才圖會百五〕饅ハメシ伊比赤飯和名古八、
造釀伊比赤飯世木波牟、

按饅硬食也、古今值嘉祝日造之、代饗猶醴醴代酒、容易備急用也、凡糯米一斗、赤小豆三升、襍蒸之、
則色帶紫、俗呼曰赤飯、以炒鹽黑胡麻少許和糝食之、

一種有白蒸者、不和赤小豆、單糯蒸之、或蒸後加入煮黑豆者、亦美麗也、並爲佛供齋日之饋、不爲慶賀
之用也、猶以饗爲嘉祝、以牡丹餅爲齋供矣、

〔厨事類記〕御膳

臨時供御内院

三月三日 御節供 赤御飯 御菜 御菓子八種 各居御臺

五月五日 赤飯 御菜 御菓子八種一種